

#### 4月14日「裏切りのキス」 阪口新牧師

#### ヘブライ書 10:1～10 ルカ福音書 22:39～53

レントもいよいよ大詰め、今日から受難週に入ります。教会では昔から、イエス・キリストが最期に過ごされた1週間を思い、この週を特別な仕方を守ってきました。多度津教会でも、今週は毎日早天祈祷会が持たれ、木曜日にはイエス様が最期の晩餐の席で弟子たちの足を洗われた出来事に由来する洗足木曜日礼拝を持ちます。金曜日は受難日と呼ばれイエス様が十字架にかけられた日、この日には会堂の明かりはすべて消されます。翌日の土曜日は、1年で唯一イエス様が私たちと共におられない、空白の日を過ごすこととなります。さて、受難週の幕開けとなる今日の主日は棕櫚の主日と呼ばれます。今日の日には、多くの教会ではイエス様が平和の王としてロバの子に乗ってエルサレムに入城され、人々が棕櫚の葉を振って出迎えたことを覚えて、棕櫚の葉を飾ります。この棕櫚は乾燥させて大事に取っておいて来年の灰の水曜日に灰にして、額に塗って悔い改めのしるしとするのです。

さあ、そんな今日皆さんと聞いたのはルカ福音書に記された、裏切りの場面でした。イエス様には大勢の敵がいました。イエス様は、多くの人を癒し、神の国の希望を語り、魂を救われました。たくさんの人々がイエス様を真の救い主だと信じ、棕櫚の葉を振って出迎えたのです。けれども、敵も大勢いました。イエス様の言葉も行いも当時の宗教的指導者たちを鋭く非難するものだったからです。特にその亀裂を決定的にしたのは神殿を批判したことだと言われています。イエス様はエルサレム神殿に居た商人たちを鞭で追い出し「お前たちは祈りの家を強盗の巣にしている！」と批判しました。これは宗教的指導者たちにとっては非常にまずい事でした。そんなことをされては、彼らは収入源を失ってしまいます。何とかイエス様を陥れようと画策しますが、イエス様を論破することは出来ません。しかも民衆はイエス様の味方をします。そして祭司長、律法学者たちはイエス様を何とか殺してやろうと計略を練るようになりました。そして、彼らに近づいたのが、イエス様が最も信頼する12弟子の1人ユダだったのです。彼らにとって必要だったのは、味方する大勢の群衆がいないところでイエス様を捕らえることでした。捕らえてさえしまえば、議会は彼らの仲間内で固めています。裁判の判決は好きなようにねつ造出来たのです。ユダは彼らにとって必要だったイエス様が一人になられる場所を知っていました。そしてその時がやってきたのです。

その日もイエス様はいつものように少数の弟子たちを引き連れ祈りに出かけられました。いつも大勢の人に囲まれているイエス様でしたがお一人で神さまと向き合う祈り

の時間をいつも大切にされる方だったとルカ福音書は伝えています。けれどもその日のイエス様はいつもと様子が違いました。弟子たちに眠らないでほしいと頼み込み、ご自身も悩み苦しまれたのです。けれども、弟子たちはイエス様の願いどおりに睡魔に打ち勝つことが出来ませんでした。そして、遂にその時がやってきます。イエス様と弟子たちがまだ話しておられると、ユダが大勢の者を引き連れてやってきました。ユダはイエス様に親しみを込めてキスをしようと近づきました。それが合図でした。群衆は捕えようと取り囲んだのです。弟子の一人は抵抗を試みてそのうちの一人に剣で切りかかりました。イエス様はそれを止められ、けがをした敵をすら癒されたのです。こうして、イエス・キリストは捕えられてしまいました。弟子たちは、イエス様を残して皆逃げ去ってしまいました。

このイエス様が捕えられる場面には強烈なアイロニー（皮肉）が描かれていると思います。ユダは「キス」を合図にイエス様を裏切ります。キスとは何でしょう？もちろん私たちにとって親愛のしるし、愛のしるしです。ユダは「愛」を語られたイエス様を「愛」のしぐさによって裏切るのです。一方で、愛と赦しを教えられていた仲間たちは剣を取って立ち向かいました。ヨハネ福音書ではこの人物はペトロだったとされています。実際は誰だか分かりませんが、かなり親しい弟子だったと考えられます。マタイには「**剣を取る者は皆、剣で滅びる**」という有名な教えがありますが、「敵を赦しなさい」「7の70倍赦しなさい」という教えを最も間近で聞いていた者の誰かが真っ先に剣を取ってしまったのです。

この皮肉の中に私たちの罪の現実を見て取れます。私たちはもちろん罪を赦され、愛されて、イエス様の弟子として教会に集まっています。そして毎週、イエス様の教えを聞いているはずですが、けれども現実はどうでしょうか？愛が語られる教会の中でもいさかきがあり、時に私たちは分裂し、裁きあいます。教会の歴史を追っていくと、輝かしい栄光の歴史ではないことに気が付きます。東西の分裂、十字軍、宗教改革、第二次大戦、現代に至るまで、聖書の解釈を巡って分裂し、異端を見つけては排除し、戦争をし、利益を奪い合い、争ってきました。キリストの親しい弟子を自認する者たちが積極的に剣を取り、キリストの教えを裏切ってきたのです。私たちは今日、改めてその罪深さに触れさせられます。

ところで少し話が変わりますが、私は新婚旅行でルネサンス期の絵画を見て回るイタリア旅行に行きました。現地のガイドさんが付いてくれて、色んな絵の解説をするとき

に聖書の話をもっと知らない日本人のために元となった聖書の話をしてくれるんですね。ちょうど、レオナルド・ダヴィンチの「最後の晩餐」の絵を見ながら、してくれたのはこんなのでした。「ユダは、イエスに早くローマからイスラエルを救って欲しかった。なのにいつまで経っても行動を起こさないイエスに業を煮やしたユダは、あえて裏切ってイエスを追い込むことで、早くローマからの解放をもたらそうとした。ユダはまさかイエスがそのまま処刑されるなんて思ってもみなかったのです・・・」私はよっぽど「嘘を教えなさい！」って言いそうになりました（笑）。聖書にそんなこと書いてないですよ。いや、分かるんですよ。ガイドさんなりにたくさん本を読んで色々な説の中から自分なりに納得いく説だったのでしょうが、それをあたかも聖書に書いてある真実のごとく話すのは止めてほしかったのです。ちゃんと前置きで「私が思うに～」と付けて欲しかった。

ただ、古代からのトピックで「なぜユダはイエス様を裏切ったのか？」ということはずっと議論されてきました。マタイでは金に目がくらんだと書いてありますし、ルカはサタンのせいにはしていますが、実際のところは分かりません。そして教会の伝統の中で、このユダだけは決して赦されない存在とされてきました。使徒言行録では、自分の買った土地で非業の死を遂げたことになっていますし、中世のダンテの神曲では、最後の審判の時が来ても地獄の底で酷い目に遭い続けるとされてきました。イエス様を裏切った張本人、悪の親玉と言えるので当然と言えば当然かもしれません。私たちはどうしてもユダに罪と責任を押し付けたい気持ちになります。けれども本当にそれでいいのでしょうか？悪いのはユダだけなのでしょうか？

最近こんなニュースがありました。ある三つ子の子どもを抱える母親が真ん中の子に暴力を振るって死なせてしまったというのです。とても痛ましく悲しい事件で、もちろん母親の罪は非常に重いと思います。ところが、この事件に対して多くの母から減刑を願う声が寄せられているというのです。というのも、この母親はパートナーや行政からの支援を受けられずたった一人で三つ子の育児を担い、産後鬱の状態だったというのです。私も妻とこの事件について話し合いましたが、本当に他人事とは思えませんでした。私も何度か子どもが病気をした時に一人で1日面倒をみたことがあります。子どももしんどいので1日中だっこです。トイレも行かず、眠いのにしんどくて寝れないでずっと泣き続ける子どもに思わず「いいかげんにしなさい！」怒鳴ってしまったことがありました。それを3人も同時に抱えて何か月も・・・もちろん殺人を肯定する気もありません。そして、天に召された子の平安を心から祈ります。しかし、どこかが違えばそれは

私だったかもしれないと思わせられます。

私たちは弱いですから、だれか犯人を作り、その人に罪と責任を押し付けたくありません。でもやっぱりそうではないのです。誰かの過ちは、自分の姿だったかもしれないそんな想像力が私たちには必要です。そして最初の弟子たちもイエス様の死をユダだけの責任にはしませんでした。イエス様の十字架の出来事を自分たちのこととして「わたしの罪を贖うため」と受け取ったのです。

今日、この後、歌う讃美歌は 306 番「あなたもそこにいたのか」はアメリカ大陸に売り飛ばされた黒人奴隷たちの魂の賛美です。アメリカ北部で奴隷として激しく虐げられ、白人たちにリンチされ木に吊るされる仲間たち。それを黙って見ていたのは「私」だった。自分たちの無力さ、弱さを歌います。「深い、深い、罪にわたしはふるえてくる」彼らはキリストの十字架を黙って見ていた弟子たちに自分たちの姿を重ねるのです。

皆さんはキリストのあの十字架は一体誰のためのものだと考えているのでしょうか？ もちろんすべての人のためです。けれども何より「私」のための十字架なのです！ 弱く罪深い私のためにキリストは十字架にかかってくださったのです。私たちはどこか十字架が他人ごとになってしまっていないでしょうか。

また私たちは罪の赦しをどのように捉えているのでしょうか？ 単なる天国行きの切符ではありません。私たちの罪は重い、果てしなく重いのです。とうてい自分たちでは負いきれない。だからキリストが代わりに負って下さったのです！ だから私たちは赦されているのです。だから私たちは愛されているのです。「5 節 あなたもそこにいたのか、主がよみがえられたとき。ああ、今思い出すと深い深い愛にわたしはふるえてくる」主の復活の場に招かれているのもまた、私たち一人一人なのです。いよいよ受難週を迎えます。キリストの十字架を思いながら、共に過ごしましょう。そして来る復活の時を静かに待ち望みたいと思います。